

「世界青年の船」事業について

滝澤 三郎

第22回「世界青年の船」事業 指導官
東洋英和女学院大学国際社会学部教授
前国連難民高等弁務官事務所駐日代表

私は28年間にわたる国際機関勤務の中で、日本人の若者の発信力、実行力の乏しさに物足りないものを感じていました。イメージが変わったのは、2010年の第22回「世界青年の船」に「国連コース」指導官として乗船した時です。乗船した数日は恥ずかしがりやで引っ込み思案に見えた日本人青年がみるみる成長し、下船の頃には外国人青年と引けを取らないほどの発信力と実行力を身に着けるのに驚きました。機会があれば日本人青年も大きく成長する証拠です。

多くの日本人青年が下船後も社会活動などの面で指導力を発揮しています。私の担当した「国連コース」のOB/OGも、下船後にケニアのスラムで小学校を運営するケニア人参加青年を支援する活動を開始し、現在も続けています。

東洋英和女学院大学の学園祭では、その小学校とのスカイプを使った交流会を毎年開きますが、参加する学生の意識が大きく変わるのが分かります。このため「青年の船」は学生の間でも人気があり、毎回2~3人の学生が参加するようになりました。参加学生の乗船後の変化が大きいため、教員の間でも「青年の船」の教育効果を高く評価する声があります。現在、「国際社会で活躍できる学生の養成」というテーマの学内研究が行われていますが、その中では「青年の船」が真っ先に取り上げられています。ちなみに去年引退した同僚教員の奥さんは活発に社会活動をしている方で、内心感心していましたが、ひょんなことから「青年の船」が始まったばかりのころの参加者だとわかりました。40年近くも国際交流に関わってきた彼女の原点は「世界青年の船」にあったのです。

私が勤務した国際機関で活躍する日本人のOG/OBも大勢おり、そのほかにも日本各地で、また世界のどこかで活躍しているOG/OBも沢山いることでしょう。もちろん日本人だけではありません。今年の八月には、インドの「世界青年の船」同窓会の招きで私のゼミ生15人を引率してニューデリーとその周辺を研修旅行で訪問しますが、SWYインド同窓会も、「青年の船」を通して日本への好感を抱いていることから、恩返しもあって招待をしてくれています。「青年の船」は日本の国際社会でのイメージを高める上でも役に立っています。

「世界青年の船」事業が効果的である大きな理由のひとつは「船」という閉ざされた空間で数週間にわたって行われることにあります。私は各種の研修会などに参加しますが、「青年の船」独特の空間・環境が若者の心、発信力と実行力に与えるポジティブなインパクトは極めて大きなものがあります。このような「空間」はインターネットの時代でも、またはインターネットの時代だからこそ必要だろうと考えます。

長年にわたり日本にとって、また国際社会にとっても貴重な人材を輩出してきた「世界青年の船」継続を心から望んでいます。

「世界青年の船」事業について

石井 晴子 北海学園大学 経営学部教授

第22回、24回「世界青年の船」事業 指導官

1 「世界青年の船」事業の価値について

国内外で必要とされる「グローバル人材」の育成に合致する、日本が誇れる国家事業である。

グローバル人材とは世界的な競争と共生が進む現代社会において、国民（日本人）としてのアイデンティティを持ちながら、教養、専門性、語学力、協調性、創造力、社会貢献の意識を持った人間である（文科省による）。さらに、国際的な競争力を持った企業では、論理性、多様性の許容度と対応力、不確定性の許容度と対応力、そしてパッション、である、としている。世界青年の船に参加した青年は上記すべての項目の必要性を約40日間という短い期間で経験し、資質を向上しようとする。そして現在の「世界青年の船」のプログラムはその育成ができるようにつくられている。また、その過程で培われた人間関係に根ざした幅広いバックグラウンドを持つ世代を超えた世界ネットワークは、単なる留学では決して作れないものである。世界的に見て社会、経済の不安から他者への許容がなくなり、個人の度量がむしろ狭くなっている今だからこそ、日本の国家プロジェクトとして「世界青年の船」というグローバル人材育成事業をしていることを内外に示すべきである。具体的に以下の項目で世界青年の船は特筆すべき長所をもつ。

(ア) 青年の発達

① リーダーシップ開発における個人の「コア」の変化、発達

全世界銀行副総裁の西水美恵子氏いわく、グローバルリーダーの資質とは、「人としてのあり方」が肝心であると。また、途上国医療を行うNPO法人理事の川原尚行氏は「信頼関係を築ける徳」が大切であるという。世界船の特色で留学では経験できないのは、将来、国のそして世界の力になろうとする260名の若者がしかも先進国と途上国の若者が一堂に会して切磋琢磨する生活環境である。世界船のリーダーシッププログラムでは「自分の人生の誇れるリーダーになるとはどういうことか」を常に問う。それは前述のグローバル人材の資質を持った者が他者や社会を導くために自分の中に柔軟で強いコアを作ることである。人をまとめようが、事業を起こそうが、そのコアを持った個人である認識を培ってもらうのである。これは講義やセミナーで終わるものではない。参加青年は日常のすべての活動にその認識をもって取り組んでいる。その過程で青年たちは様々な壁にぶち当たり、怖気づき、落ち込みを経験する。しかし、同時に各国の参加青年の度量の大きさはどのような状態でも互いをサポートしあうことができることにある。そのようにして作られたコアのある青年、「人としてのあり方」をもち、「信頼関係を築ける徳」をもった青年が地域を、日本を、そして世界を影響していくのである。

② 異文化の感受性の発達

グローバル人材の最も大切な資質は「異文化でのコンピテンス」といわれている。その中心となるものは「異文化に対する感受性」である。この項目ではSWY22とSWY24でセミナーを行い発達の度合いのデータも収集した(後述)。「異文化の感受性」とは相手の立場(世界観)から相手の言動や行動を理解してコミュニケーションする力である。参加青年達は、最初は「世界13カ国の参加者」あるいは「外国人参加青年」というくくりで互いを認識しようとするが、次第に互いを文化的複雑性を持つ個人として許容し、尊重し、その上でコミュニケーションするようになる。船での異文化感受性の発達はかなり混沌とした多文化の環境で力を発揮する資質を持つことを現す。日本の多文化化にも対応できる人材である。ひとつの国に留学をするのとはそこが異なる。この発達については「プログラムの日数」の項目でものべる。

③ 日本人参加青年の行動力の発達

「できない理由を挙げるのではなく、どうしたらできるかという方策を考える」という姿勢の発達が著しい。最初は英語力が低い、自信がない、などと言っていた日本人青年が「今、頑張らなければいつ頑張るのだ」という参加青年の後押しもあり、行動を起こしていく。この行動力の発達過程で英語力と自信が向上する。留学では受身で終わることもできるが、世界青年の船はそれを許さない。

(イ) 世界的ネットワークの構築

前述の状況での培われる人間関係は下船後に力強いネットワークを構築する。元来参加者は各国の代表としての自覚がある青年達であり、持っている潜在力は計り知れなく大きい。そういう青年達が自分を高めようとする世界中の仲間に関わり、また互いの成長に影響しあうのである。下船後の青年達にとってはそのような同胞が世界中のネットワークとなり、下船後の活動の刺激となり、また、訪問国活動の際の力となっている。

(ウ) 日本参加青年の地域への還元

世界青年の船の日本人参加青年は必ずしも東京都出身の有名大学の学生ばかりではない。それどころか、各県からの代表の青年が選抜されて乗船するのである。地方出身の青年が多文化環境で、グローバルリーダーシップとは何か、異文化の感受性を高めるとは何か、と毎日問われて生活し、成長する。その成果を地域に還元することは地域に新しい風を送ることとなる。また、この大半が仕事やボランティアを通じた地味地な還元、貢献である。特にこれから多文化コミュニティが増えていく地域ではこの経験が大いに役立つ。

2 「世界青年の船」事業が船で実施されることの意義

(ア) どこの土地でもない、外洋である、第3の環境という特殊環境であること

プログラムが始まりしばらくすると、青年たちは今まで「当たり前」と思っていた状況がないことに気づく。これは、留学経験のある参加青年でさえ、とまどう環境である。

日本人青年の中には「我」を出さずに「溶け込む」のは得意なのかもしれないが、13カ国の若者の、しかもそれも地域差があり、文化的差異でさえ100通り以上あるような